

論壇時評

〈上〉

中嶋 嶺雄

はまた残っているようにだ。
 今年定年になるのは、大学紛争收拾のため最年少で総長になった加藤一郎、文芸評論

その提案したいのは定年教授たちが再就職先で働く消費するエネルギーの余分を、

をやったりして小説を書き、自伝の研究よりも自分の自伝作家になりすましていられる。大学紛争が学生の側から一方的に描かれ、大学教授

(タイムテーブル)

世界経済の現段階を歴史的視野から

今月の論壇各誌には、世界経済の現段階を歴史的視野から展望した注目すべき論議が多かった。

その一つは、村上泰亮・香西泰・飯田経夫の共同討議「世界経済秩序は再生できるか」(Voice)だ。今日のわが国を代表し得る気鋭の経済学者によるこの討論は、「世界大不況は構造的か、一時的か」との副題に示されるように、ケインズ主義と福祉国家の「行きすぎ」のうちに現れた世界同時不況という世界的潮流の源を問うたものであり、現代文明論としても大層興味深かった。

この討論は、もともと、村上「新自由主義経済政策批判」(中央公論・一九八二年十二月号)と、香西「世界経済・新秩序への展望」(Voice・同)という二つの論文を基調としたものであるが、世界不況を長期的・構造的な要因から見る村上説と、一時的・循環的な要因を重視する香西説をのみあわせようと、飯田経夫が実に親切かつ掘り下げの深い司会役を果たす

同時不況の源を問う

▲村上泰亮・香西泰・飯田経夫「世界経済秩序は再生できるか」
 「別冊経済セミナー」の「マルクス死後100年、特集▼

批判的受容の立場から再検討

載している。

討論のあとで、飯田は、「もし、相対的にいつと、日本はまた希望があるはずだろう。もちろんそのことは、日本をめぐり国際経済摩擦をいっそう激化向ではなかつたか。」



さ、日本をより孤立化させかねない要因ではある。それが国内政治にはわかつて、われわれ日本人を狂気に走らせる危険すら、予想されないではない」といふ。この発言は今日のわが国の経済的環境が偏狭なナショナリズムを導きかねないことへの警告でもある。

米経済の回復力を高く評価する二氏
 右の討論を精々意味でも注目しているのは、香西と竹内宏の討議「世界大恐慌の再来はあるか—虎(インフ)はまたか—狼(失業)は残った」(朝日ジャーナル・二月十八日号)である。ここで竹内は、「ぼくは、アメリカ経済については、楽観的なんです。その理由は非常に感覚的なものですが、一つはニューヨークの町が目に見えるきれいになってきたこと、す」と言っている。竹内も香西もアメリカ経済の回復力に高い

そうした方向を排しつつ、地道な努力の積み重ねの結果、「何年かたつてふりかえってみれば、あるいはわれわれは、すでに意外なほど長い距離を歩んだ」といふ。その距離の長さ、文明史的転換の名にすら似て、すれかねない」といふ飯田的であった。

評価を与えているが、こうした経済学者の予測が、これまではしばしば的中しなかっただけに、アメリカ社会にかなった政治社会的分析がさらに要請されよう。この点では、佐々木毅「現代アメリカの『新保守主義』」(思想・二月号)が印象的であった。

二つした活発な経済論議にたいして、マルクス主義の立場はどのようにかかわっているのだろうか。この点で、「マルクス死後100年」と題した「別冊経済セミナー」は、注目すべきものであろう。この特集号は、マルクス死後100年の歴史的・思想的位相を全体としてマルクス主義の批判的受容という立場からとらえたものである。わが国のマルクス主義論壇の三人の旗手ともいえる平田清明・山之内靖・広松渉の巻頭の討論「マルクスは何を提起したのか」は、「資本論」再検討から除外論再考にいたる論議を基軸にマルクス主義の理論と倫理の体系を大きな思想的パースペ

マルクス主義論壇の「旗手」が討論
 比べるとまた健全な日本が、欧米並みという欄並の発想を超えた「外庄」を契機とすることなく、自らのイニシアティブで、さらに市場を開放してみせる」と述べているのは、重要な提言である。

討において、社会主義国家や非西欧社会の実態が依然として觀念的にしかとらえられていないように私は思われた。

そうしたなかで、今日の時代の一般的な傾向とは逆に、晩年の足跡を見事に描いている。たほしいと私は希望する。

傾斜を強めた著名な現代史家E・H・カーは、昨秋九〇歳で没した。漢内謙「E・H・カーとロシア革命」(世界)は、カーの検討は、漢内の文章にも欠けていた。この点をさらに解明して、カーの「革命の研究」に

(東大教授・国際関係論)